

参加アーティスト・クリエイター プロフィール、コメント

中崎 透



美術家。1976年茨城生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。現在、茨城県水戸市を拠点に活動。看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、形式を特定せず制作を展開している。展覧会多数。

2006年末より「Nadegata Instant Party」を結成し、ユニットとしても活動。2007年末より「遊戯室（中崎透+遠藤水城）」を設立し、運営に携わる。2011年よりプロジェクト FUKUSHIMA! に参加、主に美術部門のディレクションを担当。

ここ数年、よく試みている作品形式で、その場所や地域に所縁のある方たちにインタビューをして、その言葉の中から引用したテキストと、その建物や場所に残っていたものや、自作のライトボックス作品などを交えてインスタレーションを組み、土地にまつわる物語を浮かび上がらせるような劇場型の作品シリーズを制作している。今回は美術館の学芸員の方からお話を聞いて、コレクション作品や什器などを交えながらの新作を考えている。

ミヤケマイ



Photo by Satoshi Shigeta

美術家。日本の伝統的な美術や工芸の繊細さや奥深さに独自のエスプリを加え、過去・現在・未来をシームレスにつなぎながら、物事の本質や表現の普遍性を問いつける。媒体を問わない表現方法を用いて骨董・工芸・現代美術・デザイン、文芸など既存の区分を飛び越え、サイトスペシフィックなインスタレーションを展開している。

主な展覧会は、東アジア文化都市 2018 金沢「変容する家」（金沢 21 世紀美術館、2018 年）、「ことばのかたち ことばのことば」（神奈川県民ホールギャラリー、2021 年）など。2017 年、4 冊目の作品集『蝙蝠』を上梓。京都芸術大学美術工芸学科特任教授。

芸術全般に言えることだと思うが、私と同じことを考えたり、感じたりしている人がいると感じる時、何かほっこりした気持ちになるものである。

今、身の回りにそういう人がいなくても、時空を超えて共感し繋がる。孤独ではなくなる、そこが面白いのだと思う。

清水裕貴



撮影：村松 聡

1984年千葉県生まれ。武蔵野美術大学映像学科卒。風景写真を撮りながら土地の過去や伝説をリサーチし、物語を立ち上げ、写真と文章で表現している。2011年 1wall グランプリ受賞。2016年 三木淳賞受賞。Nikon サロン、Kanzan gallery、nap gallery、PGI などで作品を発表。2021年、神谷伝兵衛稲毛別荘、千葉市美術館 エントランスギャラリー、千の葉芸術祭で作品発表。2018年から小説の執筆をはじめ、新潮社の R-18 文学賞大賞受賞。2019年『ここは夜の水のほどり』（新潮社）、2022年『花盛りの椅子』（集英社）を出版。

誰よりも長く展示室の中にいる、監視係が主役の作品です。ある監視係の人は、休日は海を眺めているそうです。誰の意思も欲望も投影されていない風景で目を洗うために。展示室には作者と鑑賞者の記憶と感情が渦巻いています。そのただなかに立つ人は、鮎物めいた気配をたずさえ、静かに意識を張り巡らせています。

津田道子



アーティスト。インスタレーション、映像、パフォーマンスなど多様な形態で、鑑賞者の視線と動作によって不可視の存在を示唆する作品を制作。

主な個展は、「Trilogue」（TARO NASU、2020年）。主な展覧会に、「アジア・パシフィック・トリエンナーレ」（プリズベン・QAGOMA、2021年）、「あいちトリエンナーレ 2019：情の時代」（伊藤家住宅）がある。2013年東京藝術大学大学院映像研究科で博士号を取得。2019年 ACC のグランティとしてニューヨークに滞在。2021年より金沢美術工芸大学准教授。Tokyo Contemporary Art Award 2022-2024 受賞。

目 [mé]



アーティスト・荒神明香、ディレクター・南川憲二、インストーラー・増井宏文を中心とする現代アートチーム。個々の技術や適性を活かすチーム・クリエイションのもと、特定の手法やジャンルにこだわらず展示空間や観客を含めた状況／導線を重視し、果てしなく不確かな現実世界をわたしたちの実感に引き寄せようとする作品を展開している。

近年の活動に、個展「非常にはっきりとわからない」（千葉市美術館、2019年）、《matter α》《matter β》（ハワイ・トリエンナーレ 2022）などがある。第 28 回タカシマヤ文化基金タカシマヤ美術賞（2017年）、VOCA 展 2019 佳作受賞。

子どものころの夏休み。途方もないくらい退屈に空を眺めていた。空の雲はビタッと止まっていた。日常から抜ける方法がわからず、事実と空想、その両方の中にいた。あれから随分と時間が経った。雲はかたちを止めることなく、めくるめく動き続ける存在になった。この夏休み、千葉市美術館に所蔵された目の作品《アクリルガス》にゆっくりと向き合ってみようと思います。

小川信治



画家。「世界とは何か」をテーマに、時間と空間の構造や人間の意識とのかかわりを描いた超細密な油彩画、鉛筆画、コラージュ、映像作品などを手がける。

主な展覧会に「Shinji Ogawa - I Enter Every Reality」(ポーランド・クラクフ美術館、2019-20年)、「小川信治展—あなた以外の世界のすべて」(千葉市美術館、2016年)、「線の迷宮 II—鉛筆と黒鉛の旋律—」(目黒区美術館、2007年)、「小川信治展—干渉する世界」(国立国際美術館、2006年)、「小川信治展—Souvenir/Souverain」(豊田市美術館、2002年)などがある。

本展では最新作や日常生活から自然に生み出されるドローイングなどを出品しますが、その中で最も謎を孕む油彩画はポルティナーリ家のマリアとマルゲリータを描いた4枚の架空の初期ルネサンス風肖像画です。それぞれの人物の中心で画面を切断し再統合することで世界の全てが表現されています。さらに制作中用いた絵具を順番に塗っていった色見本も同時に展示されており、肖像画と同じ成分でできた別の表れも味わえます。

華雪



撮影：志鎌康平

書家。1975年、京都府生まれ。立命館大学文学部哲学科心理学専攻卒業。1992年より個展を中心に活動。幼い頃に漢文字学者・白川静の漢字字典に触れたことで漢字のなりたちや意味に興味を持ち、文字の成り立ちを綿密にリサーチし、現代の事象との交錯を漢字一文字として表現する作品づくりに取り組む。また、文字を使った表現の可能性を探ることを主題に、国内外でワークショップを開催。刊行物に『ATO 跡』(between the books)、『書の棲処』(赤々舎)など。『コレクション 戦争×文学』(集英社)をはじめ、書籍の題字なども多く手掛ける。

十年前、毎日眠る前(それは夜だったり明け方だったりする)に特別に準備することなく手元にある材料で「日」を書く、というルールを決めた。以来、時折中断しながらも「日」を書き重ねてきた。かさ高く積み重なる「日」の束は日々の記録と記憶そのものように思える。

そこに同時代を生きるあなたの日々をぜひ重ねてみてください。

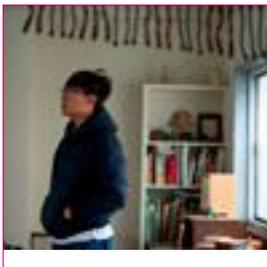
きぐう編集室



〈わたし〉のことを〈わたしたち〉のことへ。毎日のことを、本のかたちで残すプロジェクト。一個人の日記を私家本として編集し、発行している。2017年、東京から千葉に移り住んだことをきっかけに始動。主宰者である「わたし」は筆者と編集者の二役を兼ね、編集過程で自身の記録を他者のように扱い、編み直し、躓きがちな日々をケアする手立てにしている。これまでの発行物に『家を継ぎ接ぐ』(2019年)、『蛇は尾を噛む』(2020年)、『養生避難日記』(2022年)がある。

誰の人生にも起こりうる躓きやため息、小さな喜びについて、こつこつ日記を書いているうちにその量が膨大になり、句読点を打とうと本の形に編集しては、そっと流通させてきました。誰か仲間と呼べる人に出会えるといいなと思って。「表現」というよりは「処方」のような行為の重なりを、そっと置かせていただく予定です。

山野英之



グラフィックデザイナー。デザイン事務所 TAKAIYAMA inc. 主宰。奈良県生まれ。書籍、広告、ブランドデザイン、建築サインなど、平面から空間まで、グラフィックデザインを軸に活動。

個人の制作として「クソバッジ」、「B.C.G.」、「YAMANOMAX」、「オールフリー」、「UHS-α」などがある。

世界の全てはクソバッジ。

あなたのゴミは、誰かにとっての宝物かもしれない。

クソバッジはその辺に落ちているゴミクズや、世界の片隅で忘れ去られたようなガラクタに、バッジとしての命を吹きこむ、愛と平等のプロジェクトです。

整然と並べられた様々なオブジェクトは、ピンを付けることによって、元々持っていた意味をはぎ取られ、バッジという新たな存在として生まれ変わります。

さらに「クソバッジ」というバカげた枠組みにより、それぞれの価値は強引にフラットに設定されます。

人はその中から好きな色や形を探すことで、より純粋な自分と出会うことができるでしょう。

あなたにとって大切な一点(クソ)を、ぜひ見つけてください。

Mitosaya 薬草園蒸留所



2016年、千葉県大多喜町の閉園した薬草園跡に設立した蒸留所。自社で栽培する果樹や薬草・ハーブ、全国の信頼できるパートナーたちのつくる豊かな恵みを使い、発酵や蒸留という技術を用いてものづくりを行っている。「自然からの小さな発見をかたちにする」をモットーに、これまでに100種を超える蒸留酒、季節の恵みを閉じ込めた加工品、プロダクトなどをリリースしてきた。

オーナーの江口宏志は、ブックショップ「UTRECHT」元代表。蒸留家クリストフ・ケラーが営む、南ドイツのオー・ド・ヴィの蒸留所、Stählemühle (スティーレミュール) で蒸留技術を学び、特別な一本をつくり続けている。

井口直人×岩沢兄弟



井口直人

1971年生まれ。三重県出身、名古屋市在住。1987年より、社会福祉法人さふらん会 さふらん生活園（障害のある人たちが、モノづくりやアートなどさまざまな活動を通して自分らしさを表現し、まちのなかで緩やかにつながる場所）所属。2003年から、コピー機に自らの顔を押し付けてプリントする「自撮り」を開始。ほどなくして近所のコンビニエンスストアでも朝夕同じ行為を行うようになり、現在まで続いている。主な参加グループ展は、「ルイジトコトナリー類似と異なり」（はじまりの美術館、2020年）、「ヨコハマ・パラトリエンナーレ2020」（横浜市役所、2020年）など。

岩沢兄弟

「モノ・コト・ヒトのおもしろたのしい関係」を言葉に、人や組織の活動の足場となる拠点づくりを手掛けるクリエイターユニット。兄弟ともに千葉県千葉市生まれ。空間・家具などの立体物設計、デジタル・アナログ両方のツールを活用したコミュニケーション設計、オフィス空間からアートプロジェクトの拠点づくりまで幅広く活動している。千葉市美術館での「つくりかけラボ 06 岩沢兄弟|キメラ遊物園」に続き、「瀬戸内国際芸術祭 2022」では「鬼ヶ島ピカピカセンター」を制作。

コンビニのコピー機を使った井口さんの活動を実際に拝見して、井口さんの日常が街に溶け出し、コンビニ店内に非日常空間が立ち現れたような気がしました。そんな日常のルーティンをちょっとズラすことで見えてくる景色に私たちも興味があります。展示を通じて、そんなズレをみなさんと一緒に体験できればいいなと思っています。



井上尚子



撮影：うつゆみこ

美術作家。匂いと記憶をテーマに体感型作品を制作。環境、文化、歴史を匂いから楽しむ「くくんウォーク」を国内外の教育機関、美術館、植物館、公園、空港などで実施。2017年、ミュンヘンにある Museum Villa Stuck in Munich にて展覧会とワークショップ「The Library of Smell」(collaboration with 嗅覚研究者・白須未香 + サウンドアーティスト・柴山拓郎)を開催。2017～2020年、WWF ジャパンと全国の動物園とプログラム「においてめぐる動物園」を共同開発し、2019年グッドデザイン賞受賞。2005年文化庁芸術家在外研修員として、ニューヨークに滞在。

美術館が育む“においの記憶”は、気がつかないところに隠れています。展示作品と人の往来が展示室の匂いをつくり、古美術と現代美術の収蔵室の匂いは異なり、収蔵庫に彩りを与えます。そして、今も尚、眠り続けるカタログたちは今夏、偶然の日覚めを迎えます。美術館の匂いに触れ、蘇る自らの記憶を夏休みの作品としてお楽しみください。

文化屋雑貨店



1974年、長谷川義太郎が渋谷にて開店した雑貨販売企業。1946年千葉県富里生まれ、東京下町育ち。武蔵野美術大学商業デザイン科卒。装丁家・菊地信義氏のデザイン事務所に3年間勤務したのち、文化屋雑貨店を開店。雑貨店の草分け的存在として、デザイナーのポール・スミス氏など、国内外問わず多くのファンを持つ。2015年の閉店後も神出鬼没に活動を続けている。香港・文化屋雑貨店、(元)鶴谷洋服店(神保町)では、文化屋雑貨店オリジナル商品を送り込んでいる。

雑貨屋が美術館にお呼ばれ?これ文化屋大革命ですね。物を追いかけて50年、実は人を追いかけてきました。人にぶつかるとその先に物が出現する。次から次へと物と人が現れ50年。文化屋雑貨店の本は、大書店ではどの分野に置かれているか分かりません。友人曰く、土農工商文化屋雑貨店!つまり社会の範疇外。

(new) servise[西館朋央+佐久間磨]



西館朋央と佐久間磨 (Rondade) を中心に空間設計、什器等の制作を提供するプロジェクト (サービス)。既存のフレームワークに新たな関係性を見出し、自ら介入することで発生する場の揺らぎをオブジェクト (サービス) として捉え直す試み。

西館朋央

作家として展覧会を行うほか、雑誌や広告のグラフィックから店舗のアートやディスプレイなど、平面から空間まで、さまざまな媒体で活動する。2018年より千葉市にスタジオを構え、2021年、自身のプレゼンテーションの場として、gallery(NEW FOLKS)を立ち上げる。

Rondade(佐久間磨)

さまざまなアートフォームを創造の初期衝動に立ち返り、既成の枠に捉われないかたちと方法で表現することを目的に設立されたレーベル。本の形態はもちろんのこと、制作や販売方法も含めてユニークな出版を実践している。アートブック『富井大裕：関係する | Interact』、伊丹豪『photocopy』などを出版。